日本における近現代中国女性史研究の状況

石川照子*

序

本稿の目的は、日本における近現代中国女性史研究の状況を概観することにある。但しここでは、清朝末期以降(具体的にはアヘン戦争以降)を中国近代史として論を進めることとしたい。日本でも、戦前における中国女性に関連する研究や記述はいくつか残されている。例えば、民族学、文化人類学、社会史的立場からの纒足、同姓不婚、多妻制、婚姻風俗についての研究や、法制史からの婚姻法やその関連諸問題の研究といったところが、比較的多い。その他、女子労働者や政治参加についての記述も散見される(以上については、次のⅠの④所収の文献を参照)。しかし本格的な研究の開始は戦後、中華人民共和国建国以後のこととなる。本稿でも1940年代末以降の研究に絞って紹介することとしたい。以下、主な文献目録や通史・概説を順にリスト・アップしてから、テーマ別に研究状況を紹介してゆくこととする。

Ⅰ近現代中国女性史関係の文献目録

近現代中国女性史に関する、日本における研究の主要文献目録として

* 日本共立女子大學講師

©中央研究院近代史研究所

は、管見したところで、以下のものを挙げることができる（①～⑦、⑧～⑩各々発行年代順）。

①小野和子『中国女性史』平凡社、1978年の「参考文献」
②小野和子「女性史」(『アジア歴史研究入門』同朋舎、1983年）
③中山義弘「日本における近代中国女性史研究」（同『近代中国における女性解放の思想と行動』北九州書店、1983年）
④谷光隆編『アジア女性史文献目録』奈良女子大学東洋史学研究室、1984年
⑤秋吉祐子「現代中国女性研究の特徴と課題（その2）——中国・日本・英米の研究を中心として——」(『近きにありて』第14号、1988年)
⑥歴史科学協議会編『女性史研究入門』三省堂、1991年の「参考文献」
⑦「会員の女性史業績一覧」（中国女性史研究会『中国女性史研究』創刊号～第4号、1989～1992年）
⑧市古宙三& J.K.Fairbank『中国研究文献案内』東京大学出版会、1974年
⑨市古宙三編『近代中国・日中関係図書目録』汲古書院、1979年
⑩伊藤一彦他『現代中国研究案内』（『岩波講座・現代中国』別巻2、岩波書店、1990年）

①は唯一の日本語で書かれた包括的な中国近現代女性史の専書である。各章の注及び巻末の参考文献には、日本語の他、中国語、英語の文献も紹介されている。②は近代、現代を含めて、全時代を網羅している。③も近代女性史(但し太平天国から五四運動までの近代史の前半部分のみ)を論じた専書である。付篇第二部「近代中国女性史研究の成果と課題」において、日本と中国の女性史研究の状況が述べられ、太平天国から1920年代までの主な研究が、簡単な説明と共に紹介されていて参考になる。④では中国をはじめアジア諸国・地域に関する研究文献が、いくつかの目録や著書から収集されている。1980年代以降の文献は集録されていないが、戦前の文献が多数拾われているのは貴重だと言える。⑤は1978年以降の中国、日本、英米の研究を三回にわたり、特に中華人民共

和国成立以降の問題を対象として、丹念に説明している。⑥は日本の女性史研究の現在と課題を中心に、女性史の史料紹介、参考文献等が収められている。⑦は、日本における中国女性史研究の代表的な研究会である、中国女性史研究会の会報である。毎号会員の論説や研究動向、書評、資料、文献紹介、例会報告等が掲載されており、創刊号から近刊の第4号まで、会員やその他の研究者の女性史業績一覧が連載されている。

⑧⑨⑩の三冊は、中国研究全般についての文献案内であるが、⑧は、「村落共同体と家族」「法律と行政」の部分の文献が参考となる。1970年代初めまでの日本、中国、欧米の研究が収集され、簡単な説明が付されている。⑨は日中関係を中心に、戦後から1970年代までの日本語で書かれた図書を整理したもので、家族関係や伝記が参考となる。⑩では日米の研究動向、現代中国研究に関する新しい資料、文献等が紹介されている。その中から婚姻法の抄訳、「女性の社会進出」の説明・表等の、関係資料を拾いあげることができる。

II主な研究成果について

〔通史・概説〕通史としてはIの①③の他に、岸辺成雄編『世界の女性史17・中国II　革命の中の女性たち』評論社、1976年が挙げられる。但し太平天国・農村・新中国の各々の女性、丁玲・蕭紅・秋瑾・何香凝という人物をテーマ別に取り上げる形をとっており、厳密な意味での通史とは言えない。②も近代史の前半部分のみを扱っているので、包括的な女性史としては、今のところは①だけと言えるだろう。①は太平天国から文化大革命期までの女性をめる状況、運動、解放思想といったものが、歴史の展開に沿って描かれている。一人の著者によって書かれた力作であるが、当時の文化大革命の影響を強く受けており、今から見ると様々な問題点や限界も指摘できるだろう。

通史ほど網羅的ではないが、近代、現代の中国女性を概説した論文も、いくつか挙げることができる。末次玲子「男女の社会的関係」（浜口允

子編『中国の近代と現代』放送大学教育振興会、1993年）は、伝統的男女関係とその変化を、旧社会から現在までの歴史の展開の中で論じている。Ⅰの⑥の中の末次玲子「東アジアの女性像1中国」と、筧久美子「女性は天の半分を支える――中国」（富士谷あつ子編『女性学入門』サイマル出版会、1979年）は、旧社会の女性たちの状況と解放への動きを、簡潔に述べている。中華人民共和国建国以降の女性たちの状況を概説したものに、石川照子「変動の中の中国女性」（宇野重昭編『岩波講座・現代中国第3巻　静かな社会変動』岩波書店、1989年）と同「女性たちの現状」（野村浩一他編『もっと知りたい中国II　社会・文化篇』弘文堂、1991年）があり、諸政策の展開と就業・婚姻等の実態を探って、成果と課題を検討している。

〔テーマ別研究状況〕（政策・法律）女性の社会及び家庭における位置を規定し、法的権利保障の点で大きな意味を持つのが婚姻法であり、その研究は日本でも多い。新婚姻法自体の研究として、有名な法制史学者仁井田陞の『中国の伝統と革命』1（東洋文庫）平凡社、1974年が、資料も網羅的である。他に大塚勝美「中国婚姻家族法の変革」（『現代アジアの革命と法』下、勁草書房、1966年）や加藤美穂子「婚姻法」（『中国民法の研究』学陽書房、1987年）がある。中華ソヴィエト共和国及び各辺区の婚姻法については、前述の『現代アジアの革命と法』下の中に、福島正夫・宮坂宏「中華ソヴィエトおよび辺区時期の婚姻法の特質」がある。また婚姻法と女性との関係については、石川静文「中国における婚姻制度の変化と婦人の地位」（『名城商学』19、1970年）が挙げられる。**（運動史）**太平天国運動は、比較的研究の進んでいる分野だといえよう。大塚勝美「太平天国革命と婦人解放(1)～(4)－現代中国革命の源流－」（『北九州大学商経論集』1971－73年）や三石善吉「太平天国の女たち」（前掲『革命の中の女性たち』所収）、中山義弘「太平天国の婦人政策と女性の行動」（前掲『近代中国における女性解放の思想と行動』所収）、針谷美和子「太平天国における女性の位置」（『中国の伝統社会と家族』汲古書院、1993年）等がある。また清末の思想史研究と

して、小野和子「清末の婦人解放思想」(『思想』525号、1968年)を挙げておく。辛亥革命、五・四運動期も研究が盛んに行われている。辛亥革命期の政治参加と教育について、小野和子「辛亥革命期の婦人運動－女子軍と婦人参政権－」(『辛亥革命の研究』筑摩書房、1978年)と末次玲子「辛亥革命時期の婦人解放運動とプロテスタント女子教育」上下(『歴史評論』280・281号、1973年)がある。また思想史的分析として、中山義弘「辛亥革命運動期における女性解放論と女性の行動」(前掲『近代中国における女性解放の思想と行動』所収)が挙げられる。五・四運動についても、中山義弘氏が、「五四運動期における女性解放論と女性の行動」(同上書)として、政治史、思想史的な包括的研究を行っている。また小野和子氏も「五・四運動時期の婦人解放思想――家族制度イデオロギーとの対決」(『思想』590号、1973年)を書いている。1920～30年代の女子労働者及び労働運動については、当時の記述も残されている。戦後の女子工場労働者についての研究に、松林陽子「中国における紡績工業労働者の状態」(広島大学『史学研究』123号、1974年)、小野和子「旧中国における『女工哀史』」(『東方学報』第50冊、1978年)、佐藤明子「五・三〇運動における中国婦人」(『史海』27号、1980年)、曾田三郎「中国における製糸女工の状態」(『地域文化研究』第6巻、1982年)がある。一方農村女性の研究としては、旧社会から社会主義建設以後の変化を概観したものとして、石田米子「暗黒社会をくつがえす農村の女たち」(前掲『革命の中の女性たち』所収)と小野和子「むらの女たちの翻身」(前掲『中国女性史』所収)がある。その他、末次玲子「労働主体としての中国農村婦人の状態」(『講座中国近現代史』第4巻、東京大学出版会、1978年)、同「中国農村における婦人解放運動の原点」(『歴史評論』333号、1978年)が挙げられる。また、抗日戦争期の女性運動としては青柳純一「1930年代の中国女性と抗日救国運動－婦女界救国界との関連で」(『女性学年報』9号、1988年)がある。

中華人民共和国が建国されると、日本では女性解放のモデルとしての社会主義社会の女性たちへの関心が高まった。特に大躍進・文化大革命

時期の研究が進んだが、その代表として能智修弥『中国の婦人解放－人民公社と女性』新読書社、1962年、中国研究所婦人研究会編『プロレタリア文化大革命と中国の婦人たち』中国研究所、1968年、服部尙江「大躍進と女性解放の道－街道活動を中心に－」(『中国研究月報』339号、1976年)がある。また秋山洋子「新中国の女たち」(前掲『革命の中の女性たち』所収)は、社会主義建設下の女性たちを概説している。

(改革開放政策以降(1980年代～)現在までの中国女性の研究)社会学等さまざまなアプローチも参入して、多彩なテーマが取り上げられている。前述した通史・概説以外に、教育については新保敦子「現代中国社会における社会変動と人間形成」(前掲『岩波講座・現代中国第3巻』所収)、家族変動については、松戸庸子「家族の変動と社会」(同上書)、人口政策と女性の問題は、若林敬子「人口変動と一人っ子政策の登場」(同上書)がポイントをまとめている。就業問題については小浜正子「現代中国都市における性別役割分業」(前掲『中国の伝統社会と家族』所収)があり、家事労働に関する、各種農村調査に基く末次玲子「近五十年の華北農村における家事労働史」(同上書)と共に、最近の研究として挙げられる。

(人物研究)特に政治指導者に関する研究を多く指摘できる。中国女性史研究会編『中国女性解放の先駆者たち』日中出版、1984年は、秋瑾、何香凝、宋慶齢、鄧穎超等の生涯を紹介している。秋瑾は、作家の武田泰淳による『秋風秋雨人を愁殺す－秋瑾女士伝－』筑摩書房、1968年がある。宋慶齢については、久保田博子氏が「宋慶齢関係略年譜稿」(『辛亥革命研究』3号、1983年)や「宋慶齢における思想の形成と発展1」(『辛亥革命研究』4号、1984年)等、多くの成果を出している。詳しくは石川照子「宋慶齢研究の現状と課題」(津田塾大学『国際関係学研究』12号別冊、1986年)を参照されたい。その他、作家では丁玲研究の蓄積が多いと言える。

結び

以上、簡単に日本における研究状況を紹介してきた。枚数の関係で、取り上げることのできなかった研究も多数あるし、また各々の研究の論点等をじっくりと掘り下げて論じることができなかった。これらの点については、本稿中で紹介した文献案内や各文献を直接御覧になって頂くことで、御容赦願いたいと思う。これをきっかけに日本と台湾の研究者の学術交流が、今後更に深まってゆくことを願ってやまない。最後に、本稿を書く機会を与えて下さった中央研究院近代史研究所の游鑑明氏と、中国女性史研究会代表の末次玲子氏に、心から感謝の意を表したいと思う。